

尋常  
小學  
新體讀本

卷七

圖書 和圖書 遡



a 1 3 8 0 3 2 7 9 6 8 a

福岡教育大学蔵書

T1A3

10

Ki44j



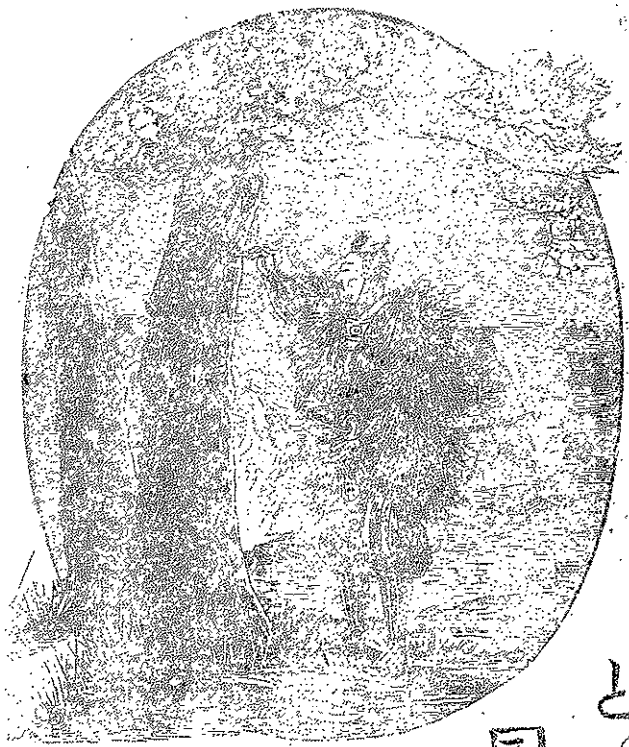
日一月十年七廿治明  
深之檢省部文

尋常  
小學  
新體讀本

卷七

第一課 兒嶋高德

元弘の昔鎌倉の執權北條高時、惡事を企て、時の天子後醍醐天皇を隱岐の國へ遷し奉らんとしたり。時ふ備後の國ふ兒嶋高德といへる人あり之を聞き、一門の人々を呼び集めて、高時身の程をもかへりみず、主上を隱岐の嶋へ遷し奉らんとせと聞けり。われ今義兵を起し途中に待ち受けて、天皇を奪ひ奉らんと思ふは以のに。



と以ひければ、皆々之ふ同意したり。

されふよりて、備前播磨の境ある舟坂の山中に隠れて伺ひ居けるに、日數経れども、御乗物の通らせ給ふ氣色見はざりしかば、人を遣はして伺えしめけるふに、已に他の道に向えせ給へりと

いふ。高德急ぎて美作の杉坂に至れば、はや此の處をも過ぎさせ給ひぬ。これを見て、今まで従ひ來れる者ども、皆力を落して、思ひくゝに落ち失せたり。

されど高德ハ其の初めは志を改めず、唯一人姿をかへて御乗物は後を追ひ行き、一たび天顔を拜して、己が心の中を奏し奉らんとしけるに、武士の見張りきびくゝて、近づき奉るまゝとを得ず。因りて、或る夜行在所の御庭ふ忍び入り

櫻の木を削り、思ふ由を書きつけて、そこを去りたり。夜明けて、武士ども、之を見出し、かど漢字は、こゝにて讀まざり、とかり、あゝ其の由を奏上しり。

天皇之を御覽下て、其の意を悟り給ひ、さてハ、尚世に義を知れる人、はありけるよ。と御心の中に、て頼もしく思ひ召し給ひしとぞ。

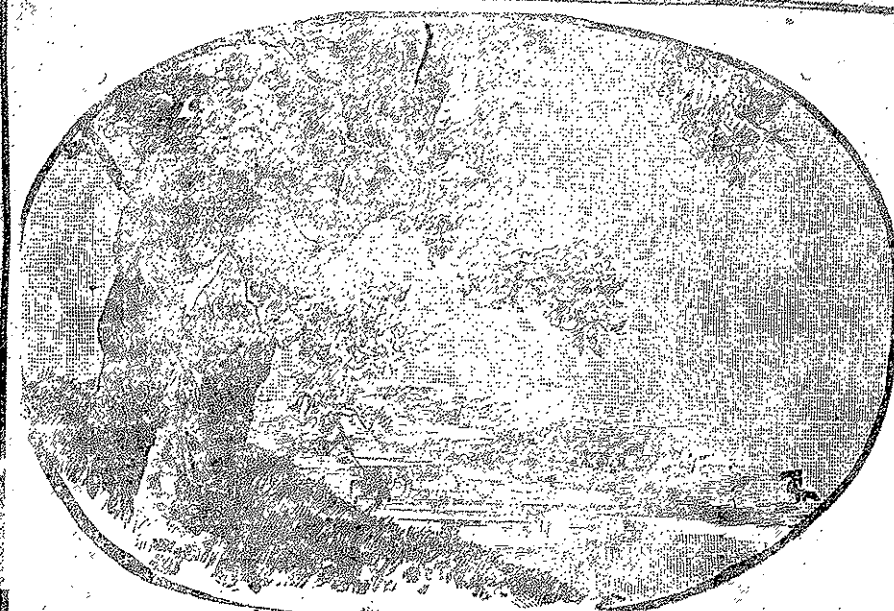
文題

一、補正成。

二、太平記を借る文。

第二課 櫻

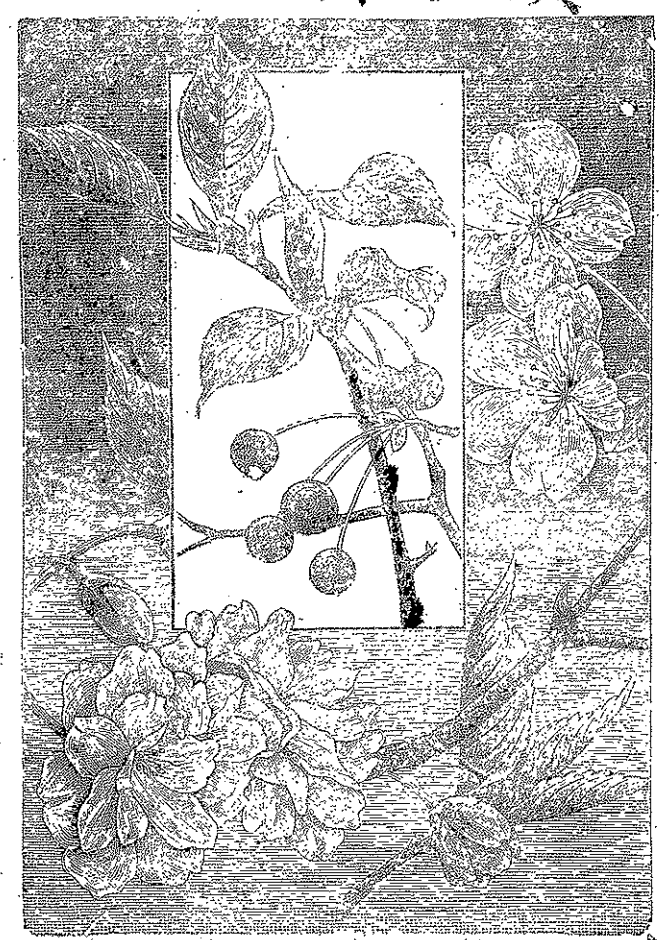




櫻の花のよきおとい、  
 づくも同ドけれど、中ふも  
 我が國の櫻も、最美く、  
 て、世界第一と稱せらる。  
 櫻の花にハ、一重あり、ハ  
 重あり、一重ハ、花びら五枚  
 あり、ハ重ハ、五枚づゝ二重  
 以上ハ重なれり。

葉ハ、花と共に出で、花落

ちて後實をむすぶ。實ハ圓く、て小さく、熟す  
 れバ、紫色とふる味、ひかく、て、酸味を帯びたり。  
 櫻の類にハ、  
 彼岸櫻、吉野櫻、  
 ぼたん櫻など、  
 さまぐ、あり、  
 何れも薄赤く、  
 して美しき故、  
 に、昔より「花ハ



櫻に人の武士といへる諺さつありて、人に賞美せらるゝおと他の花ふ超えたり。

我が國の人々ハ、皆其の行ひを正しくして、此の櫻の如く名を世界ふ輝あし、昔の武士ハ如く譽を千歳ふ遺したきことあり。

朝日にふほふ　櫻　花  
若葉ハ色も　てりそひて  
錦織り成る　吉野山  
色　よ　姿　よ　まごの國ハ

世々ふ傳つて　潔　ま  
やまとおほくも　かくぞある

文題一　兒陽曲　二　太平記を遠く

第三課　吉野山

櫻ノ名所ハ、處々ニ多ケレドモ、ワケテ名高キハ吉野山ナリ。

吉野山ハ大和ノ國ノ南ノ方ニアル山ニシテ、吉野川其ノフモトラ流ル。此ノ山ハ櫻ノ樹頗多ク、花ノ頃ニハ風景コトサラニヨシ、中ニモ、一



目千本トイヘル處ハ見渡スカギリ櫻ニテ恰白  
雲ノタナビクガ如ク畫ニモ文ニモ盡クシ難シ。  
歌ヨモモゴ、ニ到レバ名句ヲ考フハコトモナ  
ラデ唯驚クバカリナリトゾ。

此ノ山ハ唯櫻ニ名アルノミナラズ古キ昔ノ  
跡トシテ亦名高シ。

今ヨリ五百年前後醍醐天皇ノ御代ニ足利尊  
氏謀叛ヲ企テ京都ニテ別ニ天子ヲ立テ天皇ヲ  
惱マシ奉リケレバ天皇密ニ逃レテ吉野ニ行幸

シ給ヒソレヨリ三世五十餘年ノ間コ、ニオハ  
シマシキ。サレバ此ノ山ニハ其ノ頃ノ御所ノ  
跡御陵ナドモアリ又楠正行ガ辭世ノ歌ヲ書キ  
遺シタル如意輪堂モ今猶存スル故是等ヲタツ  
子トブラフモノ亦甚多シ。

文題 一、櫻。 二、花見小誘ふ文。

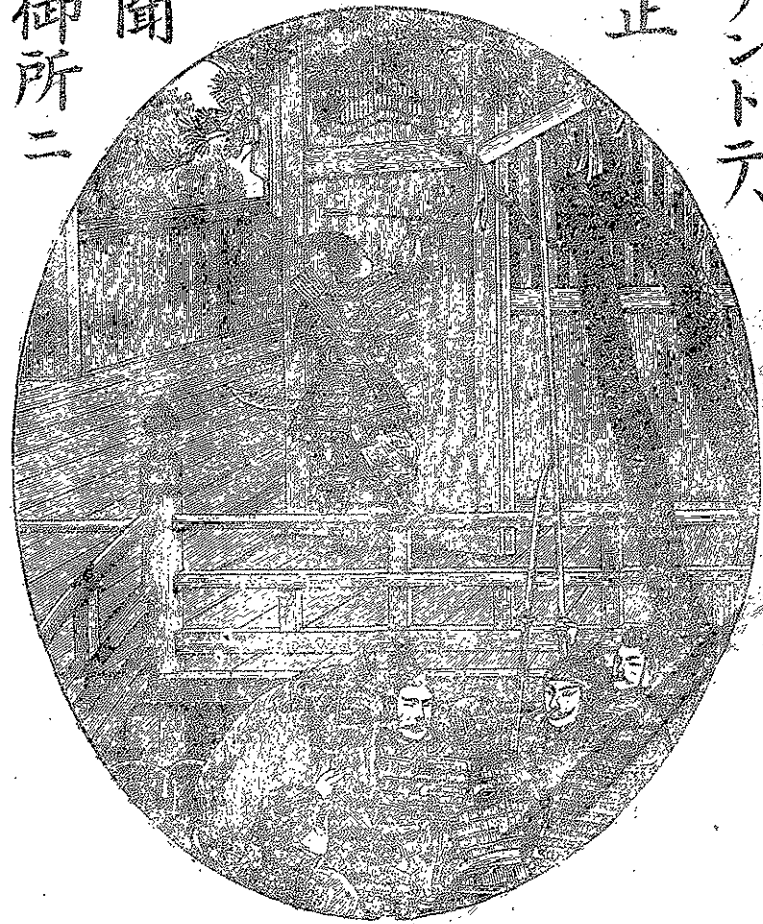
第 四 課 楠正行

楠正行ハ忠孝ノ心深カリシ人ナリ。父正成ノ  
志ヲ嗣ギテ吉野ノ御所ヲ守リ奉リ屢兵ヲ出シ

テ敵ノ大軍ヲ破リシカバ、足利尊氏大イニ懼レ、  
速ニ正行ヲ亡サントテ、  
後村上天皇ノ正  
平二年高師直  
ニ命ジ、大軍ヲ  
率テ攻メ寄  
セシメタリ。

正行斯クト聞

キテ心ヲ決シ、御所ニ



至リテ奏シケルヤウ、

先臣正成、湊川ニ赴クニ當リ、臣ニ遺訓シテ朝  
敵ヲ亡サシム。臣時二年十一歳ナリシガ、今  
已ニ壯年ニ及ビ候ヒヌ。モシ測ラザル病ニ  
カ、リ、寸功ヲモ立テズシテ死スルコトアラ  
ンニハ上ハ不忠ノ臣トナリ、下ハ不孝ノ子ト  
ナランコト、誠ニ口惜シク候フ。今師直大軍  
ヲ率テ來リ攻ム、是レ臣ガカラ盡クスベキ  
時ナリ。臣彼ガ首ヲ取ルカ、臣彼ニ首ヲ取



ラル、カ、ニツニ一ツノ覺悟ニテ候フ。願  
ハクハ、今生ニテ今一度天顏ヲ拜シ奉リタク  
候フ。  
トイフ。

天皇之ヲ聞シ召シ、近ク正行ヲ召シテ、平生ノ  
勞ヲ慰メ給ヒ、且朕汝ヲ以テ股肱トス、慎ミテ身  
ヲ全ウスベシ。ト宣ヒケレバ、正行涕ニムセビテ  
御前ヲ退キタリ。

斯クテ士卒ヲ率斗テ、後醍醐天皇ノ御陵ヲ拜

シ、一族從者一百四十三人ノ姓名ヲ如意輪堂ノ  
壁ニ書シ、且矢ノ先ニテ其ノ扉ニ、

返らドとかねて思つたあづさのみ

ふきこのどにいろ名をぞとむる。

トホリツケテ、吉野ヲ出テ河内ノ國四條畷トイ  
ヘル處ニテ、師直ノ兵ト戦ヒ、花々シキ勸シテ終  
ニ討チ死ニセリ、實ニ惜ムベキコトナラズヤ。

文題 一、言野山、二、前題の返事。

第五 課 植物ノ植エ方

草モ木モ皆地ニ植ウルモノナレバ之ヲ名ヅ  
ケテ植物トイフ。植物ヲ植ウルニハ其ノ植エ  
方ヲ知り又其ノ時節ヲ撰マザレバ多クハ根ヲ  
痛メ苗ヲ枯ラスベシ。

世ノ諺ニ木ヲ植ウルニ時ナシ木ヲシテ知ラ  
シムル勿カレトイヘリ。コレハ木ノマハリノ  
土ヲ其ノマ、澤山ニツケテ植エ替フレバ根ヲ  
痛ムルコトナキ故本ノ處ニアル如ク能ク根ヅ  
クトイヘル義ナリ。

夏ハ植物ノ成長スル最中ナリ此ノ頃ハ決シ  
テ植エカヘヲ爲スベカラズ。タトヒ移シ植エ  
テ幸ニ根ヅクコトアルモ大イニ植物ノ成長ヲ  
妨グルナリ。

植物ニハ冬移スベキモノアリ春植ウベキモ  
ノアリ其ノ品ニヨリテソレゾレ時節ヲ異ニス  
然レドモスベテ葉ノ落チ盡クシタル頃カ又ハ  
芽ノ萌エ出デ又前ニ移シ替フレバ大ニ能ク根  
ヅキテ害ナシト知ルベシ。



文題

一、補正行。

二、半種を注文する文。

第六課 桑

植物にハ必要あるもの、甚多き中に、桑は、其の最も大切なるものあり。も一桑なくハ、農夫は、蠶を養ふこと能はず、人ハ、絹糸を用ひ、絹の着物を着るゑと能わざるべし。

桑には、三種類と同一く、おせながら、わけての三種あり。おせは、葉少く、わけてハ、葉多けれども、早く蠶を養ふふハ、おせふは、わづらざれば、間ふ合ひがと

し。故ふ桑畑にも、必此の三種を植ゑ置き、て、蠶の初めより終まで、それぐ區別して與ふべし。桑ハ、楮に似たる木にて、春黄色なる花咲き、秋ふ至りて紫色の實を結ぶ、其の實ハ、甘くして酸きものあり。幹は、堅くして少一黄色を帶ぶ、木具類ふ作るにハ、有用の材なり。

桑ハ、多く苗より仕立つるものあり。苗を作るふは、良き桑の枝を曲げて土中ふ埋め置き、これより根の生むるを待ち、元の木より切り離し

て獨立の木とするあり。外木木の苗を作るに  
も此の仕方を利用するものあり、之を壓木といふ。  
すべて壓木は、丈夫ある枝を撰びて、秋に行ふ  
をよしとす。

此の外木を仕立つるふへ、接木とて、臺になる  
木を短く切り、其の切口に他の良き若木枝を  
挿みて、一つの木とせる仕方あり。又挿木とて、  
良き木の枝を伐り、土中に挿み置きて、根を生ぜ  
しむる仕方あり。

接木は、春ふ限れども、挿木は、春秋何れふても  
根づくものなり。

是等の仕方を施し、がきものへ、皆種を蒔き  
て苗を作るあり。

### 文題

一、植物種を替へる時節。

二、芋種三斗の選取

### 第七課 蠶

蠶へ、菜蟲、芋蟲などふ似たる蟲にて、見かけ甚  
宜しからず、されど世の益となることは、實ふ驚  
くばかりなり。いざ、其の生立より世の益とあ





るまでのあらまゝを語らん。  
 蠶は桑の葉を食ひて成長するものゝて、一生の中ふ二度程形を變ふるものなり、其の卵より出でたるときハ黒くして、毛蟲の子に似これども成長すれば青白くなり、後ふと口より糸を吐きて其の身を包む之を繭といふ。  
 蠶既ふ繭を造り終れば、蛹となる。蛹ハ奇妙なる蟲にて、暫くの間食はず動かずして、たゞ繭の中ふらづくまるけり。

程經れば、其の形又變り、羽生にて蝶となり、自繭をかみやぶりて出づ。此の蝶ハ羽小さく體肥にて通常の蝶に異なり、且其の命も頗短くて、卵を産み落せば間もなく死す。其の卵を産み附けたる紙を蠶卵紙又ハ種紙といふ。  
 種紙は蠶を養ふに缺くべからざるものなり、ば之を製するを以て一家の業とするものなり。

我が養蠶家の年毎に製して出さものは凡三百萬枚に下らず。

繭ハ紡ぎて絲となり、又真綿に製するものふて、其の産出は高は、一年に百五十萬石程なり。

繭より絲を取るふは、蛹の未蝶とふらざる前釜ふ入れて蒸し殺し、一旦之を日に干して後鍋に入れて煮なぐら絲を引き出さる。其の絲は生絲といひて織りて絹、縮緬などふさるもれふて、其の産出は高ハ、一年ふ百萬貫を越え、絲の

まゝにて外國へ送るものハ、一年の賣込高三千六百萬圓以上に及ぶ。蠶を養ふは利益あること之を見ても知るべきあり。

文題

一、桑。

二、歳百條薪百五十把の送狀。

第八課 絹

蠶ヨリ得タル絲ヲ或ハ練リ、或ハ染メ、シカシテ機ニ上セテ織リ得タル品ヲ絹トイフ。絹ノ織物ニハ、綾、錦ヲ初メトシテ縮緬、羽二重、魚子、海氣、銘仙、紬、太織等アリ。其ノ製造ニ名高キ地ハ、京

都ノ西陣上野ノ相生下野ノ足利等ナリ。

絹ノ織物ハ膚ニ觸ルレバ柔カニシテ快ケレドモ寒サヲ防グコトハ木綿ノ織物ニ及バズ。是レ木綿ハ人體ヲ覆ヒテ能ク其ノ溫ヲ保テドモ絹ハ其ノ力木綿ヨリ弱キ故ナリ。

スベテ物ハ其ノ性質ニ因リテ能ク熱ヲ導クト導カザルトアリ。火箸ノ先ヲ火ノ中ニ入レ置ケバ其ノ本忽熱クナリテ握リ難キニ至ルハ汝等ノ能ク知ル所ナリ。是レ金物ノ類ハ熱ヲ

導キ易キ證據ナリ。

木竹ハ其ノ末盛シニ燃ユトモ其ノ本ハ殆熱ノ傳ルヲ知ラザル程ナリ。是レ木竹ノタヤスク熱ヲ導カザル證據ナリ。

人ノ衣服トスルモノ、中麻絹ノ類ハ熱ヲ導キ易ク木綿毛織ノ類ハ熱ヲ導キ難シ。サレバ寒中ニ木綿ノ綿入ヲ着ルハ自體溫ノ空氣中ニ散ズルヲ防グノ理ニ合ヒ又暑中ニ麻ノ帷子ヲ着ルハ自體溫ヲ空氣中ニ散セシムルノ理ニ合ヘ

り。

文題 一 鷗

二種紙一枚の相場を問合はする文。

第九 課 鳥ノチエ

或ル人春ノ暖ナル日、海岸ヲ通りケルニ海水  
遠ク引キ去リテ、干潟ニ鳥ノ群リ居ルヲ見付ケ  
タリ。

其ノ人鳥ハ、今イカナルコトヲ爲シ居ルニヤ  
ト窺ヒケルニ、干潟ニ残レル貝ヲ食ハントテ、嘴  
ノカヲ極メテ其ノ殻ヲ突キ居タリ。サレド、殻

甚丈夫ニテ破レザリシカバ、鳥ハ申シ合ハセタ  
ルガ如ク、何レモ貝ヲ啣ミテ、空高ク飛ビ昇リタリ。  
ヤガテ、三四十丈モ昇リケルヨト思フ頃、啣ミ

タル貝ヲ下

ニ落シ、其ノ

岩ニ當リテ

碎クル所ヲ

見スマシ、降り來リテ、難ナク其ノ  
肉ヲ啄ミシトゾ。





落ツル物ノ勢ハ高サニ隨ヒテ強弱アリ。例  
ヘバ床ノ上一尺ノ高サヨリ茶碗ヲ落セバ、グダ  
クルコト無キモ、一丈ノ高サヨリ落セバ、大方碎  
クルガ如シ。烏ノ此ノ理ヲ自得シテ斯ク爲シ  
シコソ不思議ナレ。

文題

一、

二、前題の返事。

第十課

賢き童子

板倉重宗といへる人或る日京都の祇園社  
に詣でけるふ社の前ふ數人の童子遊び居て、さ

まごまの問答を爲せり。

其の中、一人の童子大きな聲ふて、一つより  
十まで數を唱つて、いへるやう、「一つより九つま  
では皆、おとむの終につの音あれども、十ふ限り  
てつ、の音あきい何故ぞ」と問ひけるふ、誰も之ふ  
答ふるものあかりき。

然るふ、年僅に九歳ばかりなる童子ありて、そ  
ハ、其のはずあり、一より十までの内、五つふて、つ  
の音を重ねて取りたれば、十ふハあれあきわけ

あり。」と答へたり。

重宗立ち聞きして、さても賢き童子かかと感心し、翌日人を遣はして、其の童子を己の屋敷へ招き寄せ、試みに二枚の煎餅を合はせて、之を食はしめ、今汝が食せし煎餅は、上あるもの旨きか、下あるもの旨きか。」と問ひたり。

童子ハ、あばし思案しけるが、忽手を拍ちて、今拍ちたる手は左の方鳴りしもの、右の方鳴りしか。」と問ひ返しければ、重宗益感して、遂ふ其の童子を左右ふ置きて召し使ひけるに、後果してあつぱれある人となりたりとぞ。

文題

一 烏のちぬ。

二 猫太織の類を三四端づゝ持参せよと申し送る文。

第十一課

源頼朝

今より七百年の昔、源平の兩氏武を以て朝廷に事へ、各勢を張り力を競ひけるが、遂に兵を集めて相戦ひ、源氏の大將義朝は、平氏の大將清盛の爲小殺されて、源氏忽亡びたり。

其の時、義朝の子頼朝年方十三ありしが、捕

へられて伊豆の蛭小嶋に流され、弟義經も平氏の手に入り、が生まれて未程もあゝりかば、赦されて京の鞍馬寺に送られしり。

源氏亡びて後、平氏の一門愈榮にて、樂みを極め奢りを盡くしける夢の間に、賴朝己に三十餘歳になり、以仁王の令旨を奉り、舊臣を語らひて、遂に平氏を討ずる旗を擧げたり。

義經も十六歳の時、潛み寺を出で、陸奥より下りて時節を待ち居るに、賴朝旗を擧げける由聞



えければ、馳せ上りて其の陣所より來り、討手を承らんと乞ひしり。

されより賴朝へ、相摸の鎌倉より居て東國を治め、義經は大將となり、西に向ひて平氏を討ちたり。

平氏へ、此の時清盛已に死して、重盛、弟宗盛の世

なりしが源氏を恐れて都を立ち退き攝津の一の谷に城を構へたり。

此の城は前ハ須磨の浦に向ひ、後は鶉越ふ倚りたり。鶉越ふ極めて險しき崖ふして、鹿ならでは通ひ難き所あれば、平氏の人々皆油斷して、あゝふゑ兵士を置のざりき。

義經はかねて之を料り知り、山路を越えて鶉越ふ至り、不意にされより攻め入りて、火を放ちければ、平氏の軍兵うろたへて戦ふこと能はず、

急ぎ船ふ打ち乗りて四國に逃れ、讃岐の屋嶋ふ留りぬ。

義經又急ふ屋嶋ふ押し寄せて、あゝをも追ひ落し、遂ふ長門の壇浦ふて平氏の一門を打ち亡りたり。

斯くて戦ひ勝ちて鎌倉に至りけるに、圖らずも頼朝より勸氣を受け、身を置くべき處なくて、又奥州ふ下りたり。程なく頼朝の命ふよりて、軍勢攻め寄せければ、義經今は去れまどと思ひ、



屋敷ふ火をかけて自害したり。

其の後頼朝は征夷大將軍に任ぜられ役所を鎌倉ふ開きて天下の政を執り行ひけるが三代ふ傳へて血筋絶えたり。されより其の臣下北條氏更に將軍を押して立て源氏ふ代りて政を執り數代傳へて終ふ亡ぶ。

北條氏亡びて後天下の政一旦朝廷ふ返りいかど程ふく足利尊氏謀叛を興して之を奪ひ十餘代を経て亡びたり。それより織田豊臣徳川

氏相ついで三百年が間政を執りしが今上天皇の御代に至り徳川氏將軍の職を辭しければ天下の政は昔の如く全く天皇の知し召し給ふおととなりたり。

文題 一、賢と事。

二、紬一端金三圓五十錢、太織二端金五圓、  
小て賣渡し、時の受取書。

第十二課 漆種

漆種トスルモノ、中其ノ用最廣キモノハ藍ナリ。

藍ハ二月ノ初メ種ヲ蒔ケバ其ノ年ノ八月頃

成長シテ二三尺ノ  
高サトナル。

然ルトキ之ヲ刈  
リ取リテ、ヨク揉ミ  
碎キ、其ノ葉ノミヲ  
取り分ケタルヲ揉  
藍トイフ。



揉藍ヲ室ノ中ニ子カシオケバ、遂ニタビレツ  
ブ。レテ糊ノ如キモノトナル、之ヲマロメテ塊ト

シタルヲスクモトイフ。

スクモニ水ヲ加ヘナガラ、搗キ上ゲテ團子程  
ノ大キサニナシ、染種ノ用ニ供フルモノヲ藍玉  
ト云フ。

藍氣ノ入ルベキ染物ニハ、皆藍玉ヲ用フレド  
モ、スクモヲ用フルモノモ亦多シ。

此ノ外、藍ノ葉ノ色分ノミヲ取リテ、染種トシ  
タルモノアリ、之ヲ藍靛トイフ、其ノ色頗鮮カナリ。  
藍ハ、暖キ土地ニ産スル草ナリ、日本ニテハ、四

國ノ阿波最名高ク外國ニテハ印度即昔ノテン  
デクトイヘル國最名高シ。

ベニモ染種ノ一種ニテ草ノ花ヨリ製シタル  
モノナリ。ベニノ草ハ紅花トモイフ其ノ形薊ニ  
似テ葉莖共ニ銳キ刺アリ。而シテ花ハ紅色ニ  
シテ至リテ鮮カナリ。其ノ花ヲ摘ミテ種々ノ製  
法ヲ盡クストキハ遂ニ美シキベニトナル。  
ベニハ染種トスルノ外菓子ニ色ヲ着ケ又女  
子ノ化粧ニモ用フ。

文題

一 源起。

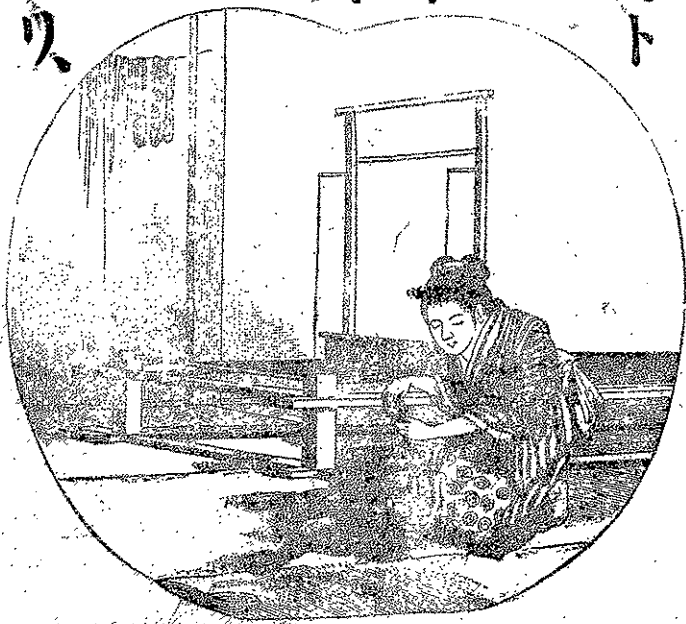
二、兵服店を開きざるを惡意の人ふ知らする文。

第十三課

井上デン女國益ヲ起ス

夏ノ衣服ニ久留米飛白ト  
イヘルモノアリ。

コレハ筑後ノ國久留米  
ヨリ織リ出スモノニテ其  
ノ初メハ井上デントイフ  
女ノ織リ出シタルナリ。  
デン女ハ久留米ノ人ナリ。



幼キ時ヨリ布ヲ織リ、衣服ヲ裁テ縫ヒスルコトヲ好ミ、師ノ許ヘモ通ハズ、自勉メテ其ノ業ヲ究メケルガ十二三歳ノ頃、試ミニ屑糸モテ白糸ノ處々ヲ縛リ、之ヲ藍汁ニ浸シ、引キ上ゲテ、縛リタル糸ヲ解キステ、コレニテ一ツノ布ヲ織リタリ。サテ其ノ織リ上リタル布ヲ見ルニ、白キマダラ細ニ顯レテ、イト珍ラシカリケレバ、時ノ人之ヲ賞シテ、雪降ヌハ霞織ト呼ビテ、イタク珍重シタリ。

デン女コレヨリ益勵ミ、工夫ヲコラシテ、多ク織リ出シケル程ニ、之ヲ買フモノ次第ニ増シタリ。十五六歳ノ頃ニハ、其ノ業愈精シクナリケレバ、其ノ家ニ就キテ業ヲ習フモノ、常ニ二十人ニ餘リ、四十歳ノ頃ニハ、其ノ教ヲ受ケテ業ヲ開キタルモノ四百人ニ及ビ、コレヨリ飛白織ノ名大イニ世ニ顯レタリ。

女ニテモ志ダニ固ケレバ、デン女ノ如キ發明ヲモ成シ遂ゲラル、モノナリ。サレバ何人モ



其ノ業ヲ勵ミテ身ノ爲ニモナリ又世ノ益トモナルコトヲ謀ルベシ。

文題 一、監。 二、前題の返事。

第十四課 三府

市街廣くして賑やのある處を都會といふ。我が國に多くの都會あれど、其の尤大きなるは、東京、大阪、京都の三つふて、之を三府といふ。東京は、武藏の國ふ在りて、南へ入海ふ臨み、東へ隅田川ふ跨れり。市街廣く、皇居を始め官廳

學校、病院、工場、公園等ふ至るまで一つも備らざるはなく、人家相並びて櫛の齒を列ねたるが如く、人の往來ハ機を織るよりも繁く、車馬の奔走日夜絶えず。

此の地ハ、凡、三百年前徳川家康は開きたる處ふて、昔ハ江戸といひし、明治の初め、今上天皇都を此處ふ遷させ給ひてより今の名に改りたり。

大阪ハ、攝津の國ふ在りて、西へ入海ふ臨み、北

ハ安治川ふ跨れり。此の地ハ、川々多くて、運送の便殊によく、古來商業の要地と稱す。

大阪城ハ、豊臣秀吉の築きたるものふて、世に類なき大石を用ひたり。

京都ハ、山城の國に在りて、三面ふ山をめぐらし、唯西南のと開けたり。此の地ハ、凡千百年の昔、桓武天皇の都を奠め給ひより、世々は帝の宮居給ふ處ふて、山水の風景殊ふよし。

東京、大阪ハ、諸國の物産悉く集り來り、商業、工業

頗盛んあり。京都ハ、二府の如く商業盛んならざれども、織物、染物ふ至りてハ、他所の及ぶ所に非ず。

文題 一、二。

二、裁縫の教授を頼み入るる文。

第十五課

信長秀吉家康

足利尊氏將軍に任ぜられてより、後子孫相繼ぎて政を執り行ひけるが、力弱くして強き大名を制する能はず、其の末年にハ天下麻の如く亂れ、英雄雲の如く起りて、互ふ領地を爭ひければ、

戦争一日も絶にざりき。是れ今を距ること凡三百五十年の昔なり。後の人此の時代を指して戦國の世といふ。

此の頃織田信長といへるもの尾張より起り、遂ふ足利氏ふ代りて天下の政を執り行へり。信長ハ平重盛の後裔ふて父は代ふハ僅ふ尾張の一部を領し居たり。信長家を嗣ぐに及びて、遂ふ尾張全國を平定し、又桶狭間の一戦ふ大敵今川義元を討ち取りて大いに威名を揚げたり。

それより美濃を取り近江を略し、上京して畿内近傍を鎮め、尚山陰、山陽兩道を平げんとて軍を出し、自京都の本能寺に宿して指揮しけるに、一夜其の臣明智光秀は爲ふ襲はれて自害したり。

此の時信長の家臣羽柴秀吉、山陽道ふ出陣しけるを、直に引き返し、光秀を討ちて主人の仇を報いたり。

秀吉ハ尾張の國中村の農家の子ふして、幼名を日吉丸と云つり。其の家貧しかりしに、十歳の頃より諸方ふ往きて人の家ふ奉公せり。二十歳の頃、自木下藤吉郎秀吉と名のり、始めて信長小事つて、其の草履取となりたり。

それより次第に出世して、姓を羽柴と改め、愈功勞を積みければ、遂ふ一方の大將に取り立てられたり。光秀を滅して後、引き續き四方の英雄を切り從へ、又ハ討ち滅して、程なく日本全國

を一統一姓を豐臣と改め、關白の職ふ任ぜられて、人臣の榮を極めたり。後支那を討ち從へんと思ひ、大軍を遣はして、先朝鮮を征伐せしめしが、たましく病みて薨トければ、我が兵遂ふ朝鮮を引き上げぬ。朝鮮征伐とハ此の軍れ事なり。

文題 一、東京。 二、前題の返事。

第十六課 前課ノ續キ

秀吉ニ代リテ天下ノ政ヲ執リタルモノハ徳川家康ナリ。



家康ハ、參河ノ國岡崎ノ城主ナリ、初メ今川義元ニ屬シテ、織田信長ト戰ヒシガ、義元戰死スルニ及ビ、參河、遠江ノ兩國ヲ平定シテ自立セリ。信長其ノ用フベキヲ知リテ好シミヲ結バント申シ入レシカバ、家康其ノ請ヲ納レテ之ト和睦シタリ。

信長秀吉相繼ギテ天下ヲ治メケル頃ハ、其ノ下ニ屬シタレドモ、少シモ威勢ヲ落サズ、次第ニ領地ヲ増シテ、遂ニ武藏近傍ノ八箇國ヲ領スル

ニ至レリ。

秀吉薨ジテ其ノ子秀賴尚幼カリシカバ、家康



前田利家ト共ニ天下ノ政ヲ執リ行ヘリ。利家卒シテ後、家康ノ威勢日ニ益盛シニナリケレバ、豐臣氏ノ家臣石田三成トイフモノ之ヲ妬ミ、諸大名ヲ語ラヒテ兵ヲ舉

ゲタリ。

家康速ニ軍勢ヲ進メテ美濃ノ關原ニ至リ、敵兵ト大戰シテ終ニ之ヲ討チ滅シタリ。コレヨリ天下ノ英雄皆家康ニ服シテ威カヲ争フ念ヲ絶チケレバ、國內善ク治リ、其ノ子孫世々將軍ニ任ゼラレテ慶應ノ末ニ至ルマデ、凡二百七十年ノ間天下ノ政ヲ執リ行ヘリ。

信長ハ剛勇ニシテ氣象人ニ勝レ、秀吉ハ大志アリテ才智ニ富ミ、家康ハ度量廣クシテ忍耐ノ心強カリシトイフ。サル故ニヤ、後ノ人此ノ三人寄リツドヒ、ホト、ギストイヘル題ニテ、發句ヲ咏ミタリトイフ話ヲ作りテ其ノ氣象ヲ示シタリ。

信長ハ

鳴かざれば殺してしまへばと、ぎす。

秀吉ハ

鳴かざれば鳴のゝて見せうほと、ぎす。

家康ハ

鳴のぎれば鳴くまでまたうほとぎす。

ワケモナキ發句ナレドモ、三人ノ氣象ハ大方斯克モアルベキカ。

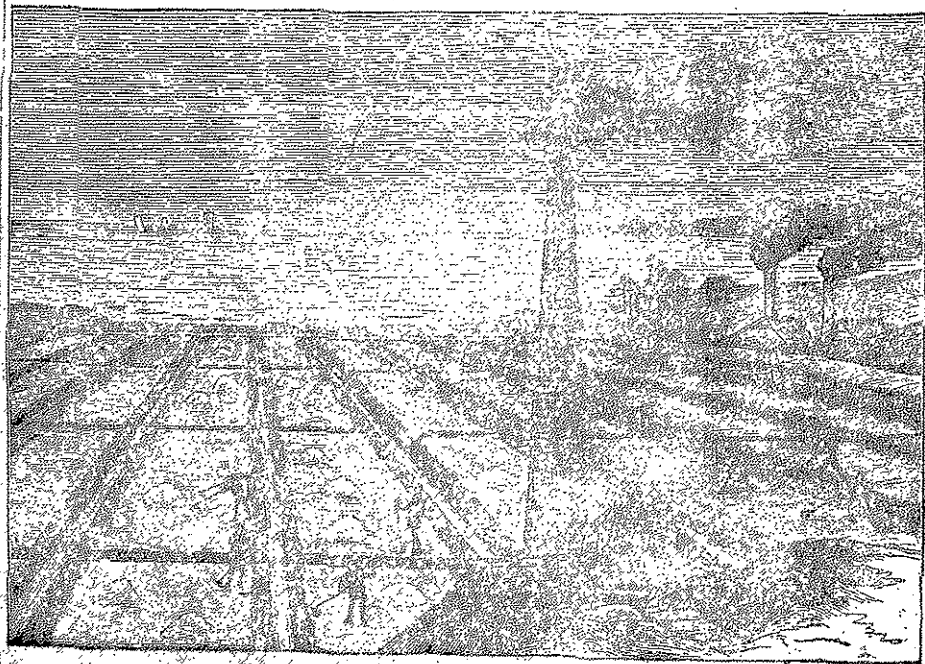
文題 一、秀言。 二、病氣に付今日參上せぬとの言をことわる文。

第十七課 鹽 砂糖

食物ニ鹽氣ヲ附クルハ鹽ニテ、甘味ヲ附クルハ砂糖ナリ。

我等ノ常ニ用フル鹽ハ皆海水ヨリ取リタルモノナリ。

鹽ヲ製スル濱ヲ鹽田トイヒ、又鹽濱トモイフ。海水ヲ汲ミテ、鹽田ニ注ギオケバ程經テ白砂糖ノ如キモノ砂ノ上ニ固リ着ク、是レ即鹽ナリ。此ノ鹽ヲ搔キ集メテ水ニ溶カシ、之ヲ漉ニテ漉シテ砂ト芥トヲ去リ、其



ノ水ヲ釜ニ入レテ煮ツムレバ遂ニ清キ鹽トナルナリ。

我が國ハ四面海ナル故ニ鹽ヲ産スル處甚多シ。其ノ中播磨ノ赤穂阿波ノ齋田等ハ製鹽ニ適シタル地ニシテ古來佳良ノ品ヲ出セリ。

砂糖ハ多ク甘蔗ノ汁ニテ製ス。甘蔗ハ稔ニ似テ莖太ク長ケ高シ。其ノ莖ノ汁ハ甘クシテ多ク砂糖トナルベキモノヲ含ム。故ニ其ノ汁ヲ搾リ鍋ニ入レテ煮ツメ之ヲ晒シテ砂糖トス

ルナリ。

文題

一、家康。

二、鉄席屋。

第十八課

おかちの局

徳川家康或る時家來を集め四方山の物語せられけるととき一坐のもねふ向ひて

いかに人々世の中の味よき品は何物なりと

思ふ。

と問ひたり。

人々之を聞き俄にそれと思ひ出づる由もあ

く只考つて居こりーに傍に居たるおかちの局  
といふものうち笑みて見なければ家康、  
汝思ひよりたるおとあらば申さべー。

といへり。

其の時おかち謹みていひけるやう、

世の中は味よきものハ鹽にて候ふ。其の故は、  
何程の料理ありとも鹽なくてハ食ひがたう  
こす。

といひければ家康を初めとして人々大いに感

動たり。

家康又、

世の中の味なき品は何物あるべーや。

と問ひければ人々承りておかちお向ひ、

只今の局の答我等の及ぶ所お非ずとても  
事お此は御答をもせられ候へ。

と勧めーかばおかち又

世の中の味あきものも鹽ふてある候へ、其の  
故はさづての味よきものも鹽をさごせバ得



食へず。

といひければ、人々益其の思の外ある智慧あるに驚きたり。

文題

一、鹽の製法。

二、缺席席の差出方を朋友に頼む文。

第十九課

旅人熊に遇ふ

或る山に猛獸の一なる熊多く住めり。一日ふたりの旅人連れ立ちて、此の山を過ぎんとけるが、其の麓にて、甲は乙に向ひ、

あゝには昔から熊が多くて、たびく旅人を

食ひ殺した故、此處を通るハ實に心もとなく思ひます。もゝ山中で熊に逢つたならば、どうもませうの、所詮我々兩人では防ぎかねませう。

といふば、乙笑ひて、

お前さん、そんなに心配しないで、もよのらう。私ハ二本の腕をもつて居る熊ぐらゐるふけるもの。此の腕のあらん限りハ、何の飛びかかりて來るとも、物の美事に打ち勝つて御覽に

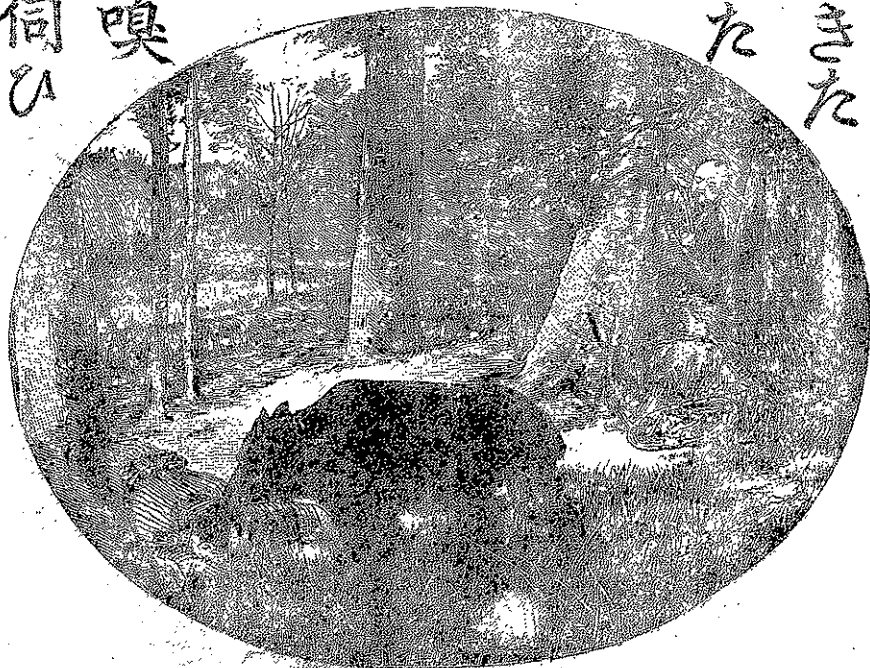
入れます。

といふ。

甲ハ斯くと聞きて、心強く思ひ、共ふ山深く進み入りけるに、たま〜近き處ふて、熊の鳴き聲、いければ、乙ハ先の言にも似ず、大いふ恐れて、忽、いづくへか隠れさり。甲ハ、ひひのひなきこのふるまひかなとつぶやきあがら、續いて逃げんとする處へ熊既ふ迫り來りて、遁るべき暇なかり〜か、道の傍に倒れて死人の真似を爲した

り。おれかねて熊は、生きたるものを食へども死したる肉ハ、食えずと聞き居り〜故に、逃ぐるに道なくて、止むを得ず斯くしたるあり。

熊ハ、やがて甲の傍に進み寄り、頻にゐところを嗅ぎまはして、息の有無を伺ひ



けるが、全く死人と思ひけん其のまゝ林の中に入りたり。

此の時先にいつくつか隠れたる乙出て來り、甲ふ向ひて戯れに

今熊がお前の耳もとに口を寄せて何か話したやうに見はこゝろ、あれハ、一たい何を話したのか。

と問へり。

甲ハ憤を含めて、

外の事ではない、信實のないものといハ、交るな。又、妄りに大言を吐くものといハ、交るふといひまゝと。

と答へるか、乙ハ顔を赤らめたるのみふて返す言葉もなかりとぞ。

文題 一 砂糖の製法。 二 旅行を知らずの文。

第二十課 獵師

山中ニ住ミテ鳥獸ヲ捕フルコトヲ業トスルモノヲ獵師トイフ。

此ノ圖ヲ見ヨ、獵師ハ雉ト兎トヲ打テ取リテ、  
山ヨリ歸リ來レリ。

兎ハ耳長キ獸ニテ、前足ハ後足ヨリ短ク、山坂  
ヲ走ルコ  
ト甚速ナ  
リ。其ノ  
肉ハ味ヒ  
ヨクシテ、雞ノ如ク、皮ハ柔カニシテ、帽子又ハエ  
リマキトスルニカナフ。



雉ハ雞ニ似テ、羽毛美シク、尾甚長シ。肉ハ味  
ヒ旨クシテ、食用トスルニヨシ。

獵師ノ捕フルモノ、中其ノ重ナルモノヲイ  
ヘバ、鳥ニハ雉、山鳥ノ類アリ、獸ニハ熊、鹿、猪、兎ノ  
類アリ。

山鳥ハ雉ニ似タル鳥ナレド、雉ホドニハ美シ  
カラズ。サレド、其ノ肉ハ亦食フニヨシ。

熊ハ馬ヨリ小サク、犬ヨリ大イナル獸ナリ。  
全身黒クシテ、力強シ。常ニ生物ヲ捕ヘテ之ヲ

食トス。

鹿ハ首長ク脊高クシテ、其ノ形稍馬ニ似タリ。  
其ノ牡ニハ角アレドモ牝ニハナシ。熊鹿ノ皮  
ハ剥ギテ敷物等ニ製シ、肉ハ食用ニ供ス。

猪ハ首短ク體肥エテ豚ニ似タリ。口ニハ尖  
リタル二本ノ牙アリ、怒ル時ハ、コレニテ敵ヲ斃  
シ、人ヲ傷ツクルコトアリ。其ノ肉モ豚ニ似テ  
脂肪多シ。

文題

一、旁リニ大言ヲ吐クベカラズ。

二、歸郷を知らずる文。

第二十一課

立身ノ心得

凡人ト生マレテ、ソレ〴〵職業ヲ執ルハ、本ヨ  
リ當前ノ事ナリ。タトヒ廣キ田畑ヲ持チ、多ク  
ノ金銀ヲ貯フトモ、手ヲ懷ニシテ遊ビ居ランニ  
ハ、田畑忽ニ荒レ果テ金銀オヒ〴〵ニ散リウセ  
テ、イツシカ貧シキ身トナルコト必定ナリ。マ  
シテヤ初メヨリ貧シキモノハ、其ノ落チブル、  
コト速ニシテ、且、甚シ。

サレバ富メル人モ貧シキ人モ、其ノ分ニ從ヒ、



ソレド、職業ヲ勤メテ家ノ繁昌ヲ謀ルベシ。  
家ノ繁昌ヲ謀ランニハ、農夫ノ子ハ早クヨリ  
田畑ヲ耕シ、肥料ヲ施ス等ノ仕方ヲ學ビテ、良キ  
農夫トナリ、職人ノ子ハ早クヨリ道具ノ使ヒヤ  
ウ器具ノ造方等ヲ習ヒテ上手ノ職工タラント  
志スベシ。商人ノ子ハ早クヨリ帳面ノ附方品  
物ノ仕入方、客ノ取扱方等ヲ覺エテ、良キ商人タ  
ラント心ガクベシ。

農夫モ職工モ商人モ常ニ此ノ心ガケヲ失ハ  
ズシテ、一心ニ其ノ業ヲ勤ムルトキハ、イツシ  
カ家富ミ榮エテ、目出タキ身トナリスルコト疑  
ナシ。

### 文題

一、微師。 二、土産を贈る文。

### 第二十二課 二宮金次郎

天保中相摸の國に、二宮金次郎といへる名高  
き人あり。此の人五歳時、其の家の田畑洪水  
の爲に荒されて家漸衰へ初めたり。おれより  
不幸の事打ち重なりて、田畑漸々ふ人の手ふ渡

り十四歳の時父病死して家愈貧しくあり朝夕の煙も立てかぬる程ふ至りたり。

金次郎幼年なれども晝も山ふ行きて薪を採り柴を刈り夜へ家ふ在りて繩をなひ鞋を作りて之を賣り僅に母と弟とを養ひ居たり。

程なく母も死しければ親類共打ち寄りて相談し金次郎へ萬兵衛といふもの引き取り二人の弟へ母の里にて引き取ることゝありぬ。

金次郎既ふ萬兵衛の家ふ至りけるふ萬兵衛

へ元來甚し

き吝嗇にて

おさけも知

らぬ人物な

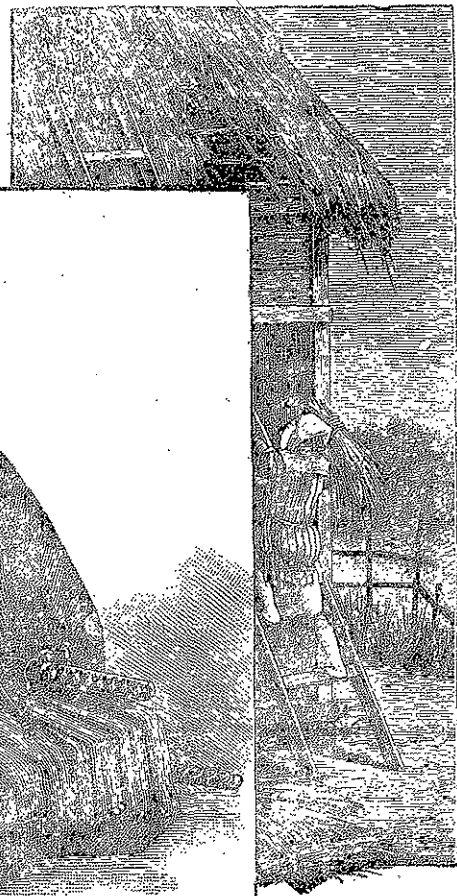
ればむごく

金次郎を使ひて一

寸の暇をも與つざ

りき。

然れども金次郎





然るに其の家ハ屋根破れ壁落ちて、雨風を凌ぎがこのりゝかむ、自屋根を繕ひ壁を塗りて、略住みやそくゝたり。おれより日々家業を勤め、物の費を省きて、一心小家の繁昌を謀りければ、程なく父の賣りたる田畑を買い戻し、遂に一家を興して其の志を遂げたり。

文題

一、農。

二、卒業の後、先小せおふりたる人のもとへ送る文。

第二十三課

新井白石

新井白石はたゞ手習の話に名高きものなら

ず、學問もよく、朋友ふも頼もゝくゝて、男氣のありゝ人あり。壯年の頃、木下順庵といへる學者の門ふ入りて、業を修めけるふ、才智をぐれ學問博くゝて、誰一人とゝて及ぶものゐりき。

其の頃、加賀の前田家より、「一人の學者を召し抱へたければ、御門人の中、然るべきものを撰びて遣はされ」と。順庵は許へ申し越ゝたり。是ふ於て順庵一番弟子なる白石を呼びて、前田家へ事ふべき由を勧めたり。然るに同門人

なる岡嶋石梁といへる人之を聞きつけ、白石の  
もとに行きて、いひけるやう、

君も御承知の通り、私に加賀のものであるが、  
國を出て當地に参つてからはや六七年ふあり  
ます。然るに故郷の老母が心細いのゝて、  
手紙の度毎に早く歸れと申してきます。私  
も老母は身の上を思ひ、又其の手紙を読む毎  
に胸をさかるゝやうに苦しいと思ひます。

承れば、今度君は先生の御撰擧で、前田家へ事

へらるゝ趣でござるが、何とかして君の代り  
に、私を前田家へ御世話下さるやう、先生へ御  
頼み下さることゝ出来ますまいか。

萬一此の願が叶へば、老母の悦を申さまでも  
なく、私ふ於ても聊、孝道を立ち、此の上もない  
仕合であります。

とくれぐゝも頼み入れたり。

白石は石梁の言を聞きて、親子の情さこそあ  
るべけれど、心ふ感に、



御依頼の儀を委細承知しました。せいぐ  
力を盡くして御志の貫くやうにいたし申さ  
ん。

とて、直に師のもとに行きて、委しき話を爲し、  
私をつまり何れの國へ往きましても宜しい  
身でござりませぬ此の度の何とぞ私の代  
りに、石梁を御世話下さるやう願ひ奉ります。  
といひたり。

順庵之を聞いて深く白石の男氣あるを感得、

遂に其の請の如くに爲したり。

此の後程もなく白石は徳川家宣に召し抱へ  
られけるが家宣將軍となるに及びて、重く用ひ  
られし。

文題 一、二宮金次郎。 二、家屋の出来たるを知らずる文。

第二十四課 孝次郎父母の安否を問ふ

或る家に太田孝次郎といへるおとこありき男  
の子ありけり。久しく遠方なる伯父のもとに  
ありて、學問を修めけるが屢郵便を出して、故郷

なる父母の安否を問ひたり。

或る年は暑中孝次郎の両親を見舞へる手紙に、

手紙を以て申し上げ奉り此の頃を暑さ烈しく相成は處所両親様如何所暮しあるをされ哉伺ひ奉り私事を相成らず又夫にて日と學校へ通ひ居り間憚ながら所安心下され度願ひ上げ先と暑中御見舞まで此の如くに所座に敬白

七月廿一日

孝次郎

御両親様

とあり猶其の後に、

二白 伯父と始め皆と又夫に暮し居る是れ又所安心下されなり

と小さく記したり。實によく行き届きたりと云ふべし。

文題

一、新井白石。

二、家を移しし事を知る文。

卷一	卷三	明治廿七年八月十二日印	刷	定	卷一金六	卷二金七	卷三金八	卷四金九	卷五金十	卷六金十一	卷七金十二	卷八金十三	卷九金十四	卷十金十五
同	同	明治廿七年九月廿五日訂正再版印刷	行	價	卷三金八錢四厘	卷四金九錢六厘	卷五金十錢八厘	卷六金十一錢四厘	卷七金十二錢六厘	卷八金十三錢八厘	卷九金十四錢四厘	卷十金十五錢六厘	卷十一金十六錢八厘	卷十二金十七錢四厘
自卷四至卷八	同	年九月廿八日發	行											



金港堂書籍株式會社編輯所編輯

發行兼印刷者

金港堂書籍株式會社  
東京市日本橋區本町三丁目十七番地

代表者

右社長  
原亮三郎  
東京市下谷區龍泉寺町四百十番地

東京府教科書

大賣捌所

社会科

尋常小學新體作文教授書  
尋常小學新體讀本字解

定價金五拾七錢  
定價金拾貳錢



明治27.  
24  
柳川島

全書  
三卷  
三會  
不